

教育実践報告

教育学部教職センターにおける  
特別支援学校教育実習の取り組み(4)  
—模擬授業を中心に据えた事前指導に関する  
実習校・実習生による事後評価—

矢野口 仁・樋口 一宗・石黒 栄亀・山本 ゆう

Promoting the Teaching Practice of the Special School for Children with Disabilities at  
the Support Center for Teaching (4):  
The Post-Evaluation of Pre-Teaching Centered on Mock Lessons.

YANOKUCHI Hitoshi, HIGUCHI Kazumune, ISHIGURO Eiki,  
and YAMAMOTO Yu

## 要 旨

2023年度特別支援学校教育実習の準備において教育学部教職センターでは、前年度の事後調査の結果を受け、学部からの実習受入れ依頼時期や学生による受入れ依頼のための学校訪問に関する実習校からの要望に柔軟に対応したり、学部での事前指導を模擬授業を中心に据えて行ったりした。これらの対応について実習校・実習生に事後評価を求めたところ、一定の評価を得た。その一方、学部からの実習受入れ依頼時期については各校が置かれた状況に応じてより柔軟な対応が必要であることや、学部での事前指導については実習生の実態に応じた入念な個別指導が必要であることが明らかになった。

## キーワード

特別支援学校教育実習 模擬授業 事前指導 事後評価

## 目 次

- I. はじめに
  - II. 2023年度特別支援学校教育実習の概要
  - III. 事後アンケート調査の結果
  - IV. 考察
  - V. まとめ
- 謝辞  
文献

## I. はじめに

松本大学教育学部では、2020年度以降長野県内外の公立特別支援学校の協力を得て特別支援学校教育実習(以下「特支教育実習」)を行ってきた。その際、教育学部教職センター(以下「センター」)では毎年実習校と実習生に事後アンケート調査を行い、そこで明らかになった課題を基に次年度の教育実習に向けての手続きや教育実習事前指導・事後指導の授業内容に変更を加えてきた。その経緯及び内容については、矢野口・小島・小林・内藤(2021)<sup>1)</sup>、矢野口・小林・樋口・石黒(2022)<sup>2)</sup>、矢野口・樋口・石黒・山本(2023)<sup>3)</sup>で報告してきた。

特支教育実習に向けて大学が事前に指導する内容を、実習校・実習生からの意見・感想を基に複数年にわたって検討・改善してきた研究はこれまでも行われてきた。今野・池田・小川(2018)<sup>4)</sup>は、7年間にわたる特支教育実習の実習指導担当教員へのアンケート調査により、実習指導担当教員が実習生に事前に身につけておいてほしいと考えることのうち、「障害の基本的な特性」、「指導案の書き方」、「教師の心得」がいずれも4割を超えることを示唆した。中村・高井・橋詰・宇野(2018)<sup>5)</sup>は、2年間155名の実習生全員が教育実習終了後に提出した特別支援学校教育実習報告書を分析し、実習に関する自己評価は実習先での配属学部と関連が見られるとし、特に中学部で実習する学生については、中学部での教育内容に即した事前指導が必要になることを示唆した。鎌田・石黒・堀江・高良(2020)<sup>6)</sup>は、6年間にわたる実習後の教育実習評価表、教育実習日誌等を基に教員に求められる資質能力の視点から教育実習への対応と課題をまとめ、科目である特別支援学校教育実習事前指導事後指導等や学生ボランティア活動を更に充実させるために、「教職準備期間」を充実させるよう学生一人一人の学修状況を把握する必要があることを示唆した。

本学部ではこれらの先行研究に学びつつ、2023年度の特支教育実習に向けて、前年度の事後評価で明らかになった実習の手続きや事前指導に関する課題について、以下の3点の対応を行った。

1)実習校が松本大学からの実習受入れ依頼を他大学からの依頼と同時に検討できるよう、時期を早めて前年1月に仮依頼。

2)実習校の負担感を軽減するために、学生による実習受入れ依頼のための学校訪問を、学校の意向に沿って一部を電話と文書での依頼に変更。

3)事前指導として、①学習指導案の書き方に関する個別指導、②児童生徒の実態に合わせた教材の用意やTTによる授業の進め方に重点を置いた模擬授業、③模擬授業を参観する学生への授業記録の取り方の個別指導<sup>7)</sup>、授業記録を活用した学生間の質疑応答、④実習中の目標の立て方や振り返り方について指導を行った。実習記録簿の記入内容に個人差が大きいことも課題になっていたが、これらの対応の結果として、記入する内容が質、量とも充実することを狙いとしたり。

この他にも、2023年度後期から、4年生(2023年度実習生)と3年生(2024年度実習予定生)の授業時間を合わせ、事前指導・事後指導の授業を相互に参観できるようにした。こちらについては別の機会に改めて報告する予定である。

本稿では、本学部の2023年度特支教育実習の概要を記すとともに、特支教育実習に向けての手続きや事前指導について実習校・実習生を対象に行った事後アンケート調査の結果を記すとともに、過去2回分の結果と比較して考察する。

## II. 2023年度特別支援学校教育実習の概要

### 1. 人数、配置方法、時期、参観訪問回数

2023年度特支教育実習における実習生は25名、実習校は15校だった。そのうち20名が長野県内の公立知的・肢体不自由・病弱特別支援学校11校で、5名が長野県に隣接する県の公立知的・総合特別支援学校4校で実習を行った。

実習生の配置は、過去3回の実習と同様、長野県内においては実習前年の5月に長野県特別支援学校校長会(以下「県特長会」)を通じて各特別支援学校の実習生受入れ可能数を調査し、前年7月にセンターが行った。それに先立つ1月には受入れをお願いしたい人数を各実習校に示し、仮依頼した(対応点1)。また、学生による実習受入れ依頼のための学校訪問を、学校の意向に沿って一部を電話と文書での依頼

に変更した(対応点2)。

県外についてはセンターが直接各特別支援学校と実習前年1月から連絡を取り始め、それ以降実習校の意向に沿って手続きを進めた。学生による実習受け入れ依頼のための学校訪問については、それを進めようとした2022年度がまだ新型コロナ禍にあったため、実習校の意向に沿って電話と文書による依頼に変更することが多かった。

実習時期は6月から11月で前年度と変わらなかった。その内訳は表1のとおりである。月各の割合は9月と10月の2ヶ月で64.0%(前年度は55.2%)を占め、この期間に集中する傾向が強まった。

実習期間中の大学教職員の参観訪問については、新型コロナの感染法上の扱いが5類に移行したことを受け、実習校15校全校に対して実施し、9人の教員・専門員が延べ18回訪問した。

表1 2023年度特支教育実習の実施時期

月	人数(人)	割合(%)
6月	4	16.0
9月	10	40.0
10月	6	24.0
11月	5	20.0
計	25	100.0

## 2. 「2023年度特支教育実習事前指導・事後指導」の経過・内容

「2023年度特支教育実習事前指導・事後指導」の経過・内容は表2のとおりである。

授業は新型コロナの感染法上の扱いが5類に移行したことを受け、全て対面で実施した。

## Ⅲ. 事後アンケート調査の結果

### 1. 実習校を対象にした事後アンケート調査の結果

#### 1)対象校

・2023年度特支教育実習の実習校15校

#### 2)時期

・2023年12月

#### 3)方法

長野県内の特別支援学校については、県特長会の実習担当者を通じて調査用紙を配布し、センターに直接返送してもらった。県外の特別支援学校については、センターから調査用紙を郵送し、センターに返送してもらった。

調査では、教育実習生の受入れと実習期間の決定までの手順、教育実習の事前打ち合わせの手順等、教育実習期間中の大学の対応、大学の教育実習に向けての事前指導について、(ア)よい、(イ)概ねよい、(ウ)やや改善を要する、(エ)大いに改善を要するの4段階で回答を求め、可能な範囲で理由や詳細を自由記述で記入してもらった。

#### 4)結果

回答数は15、回収率は100%であった。内訳は表3のとおりである。過去2回分と合わせたものを図1～4に示す。図中の縦軸の数字は全て「%」である。(以下同じ)

#### ①教育実習生の受入れと実習期間の決定までの手順について

「よい」「概ねよい」が9割を超えたが、「やや改善を要する」が1校(6.7%)あり、「松本大学からの実習受け入れ打診の時期が実習前年1月ということで他大学より早く、公平な扱いをするためにできれば大学間で取り決めて同じ時期に連絡をいただきたい」との指摘があった。(図1)

#### ②教育実習の事前打ち合わせの手順等に関して

「よい」「概ねよい」が10割であった。

「概ねよい」の3校からは、「打ち合わせの前に子どもと触れ合う機会を1日持てるとよい」、「学生の実態に応じて、大学でも事前に細かな指導が必要な場合もある」との指摘があった。(図2)

#### ③教育実習期間中の大学の対応について

「よい」「概ねよい」が10割であった。(図3)

表2 「2023年度特支教育実習事前指導・事後指導」の経過・内容

回	内 容	授業方法
1	・オリエンテーション① ・「事前指導」受講について ・今後のスケジュール ・長野県特別支援学校の教育理念等	対面
2	・オリエンテーション② ・学習指導案作成の課題と模擬授業の進め方について(提出期限、扱い方) ・生活単元学習の考え方と学習指導案作成について ・特支教育実習に向けての心構えについて	対面
3	・オリエンテーション③ ・学習指導案作成の課題と模擬授業の進め方について(提出課題への指導とグループ分け等模擬授業の準備)(対応点3) ・実習期間、教育実習実施要領、実習の目標設定について(対応点3) ・授業観察記録の取り方について(対応点3)	対面
4	・生活単元学習指導案に関する指導(対応点3)	対面
5	・模擬授業①(6月、9月実習生)(対応点3)	対面
6	・実習の目標発表①(6、9月実習生)(対応点3)	対面
7	・実習報告①(6月実習生)	対面
8	・模擬授業②(9月、10月実習生)(対応点3)	対面
9	・実習の目標発表②(9月、10月実習生)(対応点3)	対面
10	・模擬授業③(10月、11月実習生)(対応点3)	対面
11	・実習の目標発表③(10月・11月実習生)(対応点3) ※3年生も参観	対面
12	・実習報告②(9月実習生) ※3年生も参観	対面
13	・実習報告③(9月、10月実習生)	対面
14	・実習報告④(10月・11月実習生)	対面
15	・実習のまとめ ※4年生が3年生の模擬授業を参観・助言	対面

表3 2023年度特支教育実習に関する事後アンケート調査の結果(実習校)

項 目	回 答			
	「よい」校数 (%)	「概ねよい」校数 (%)	「やや改善を 要する」校数(%)	「大いに改善を 要する」校数(%)
①教育実習生の受入れと実習期間の決定までの手順について	13 (86.6)	1 (6.7)	1 (6.7)	0 (0.0)
②教育実習の事前打ち合わせの手順等について	12 (80.0)	3 (20.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
③教育実習期間中の大学の対応の対応について	13 (86.7)	2 (13.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
④大学の教育実習に向けての事前指導について	12 (80.0)	1 (6.7)	2 (13.3)	0 (0.0)

「概ねよい」の2校からは、「訪問された先生に実習校側が十分対応できないときがあった」、「限られた時間であったため、学生は大学の先生から授業の感想をその場で聞くことができていなかった」との指摘があった。

④大学の教育実習に向けての事前指導について

「よい」「概ねよい」が9割を割り、「やや改善を要する」が2校(13.3%)あった。(図4)

その内容は、「実習日誌の書き方、活用の仕方の事前指導について検討いただきたい」、「実習にあたり自分で考えて行動したり、分からないところを自分から質問したりする気持ちを育てたい」、「指導案の書き方の指導について重ねてほしい」、「教員としての資質の前に社会人としての資質の育成をほしい」、「提出物の期限を厳守することについての指導をほしい」との指摘があった。

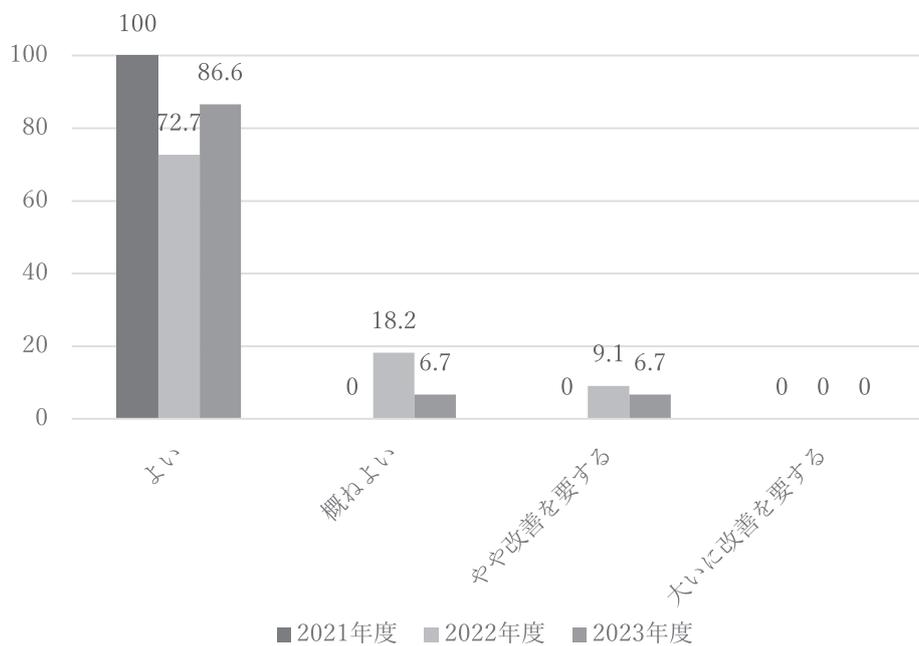


図1. ①教育実習生の受入れと実習期間の決定までの手順について

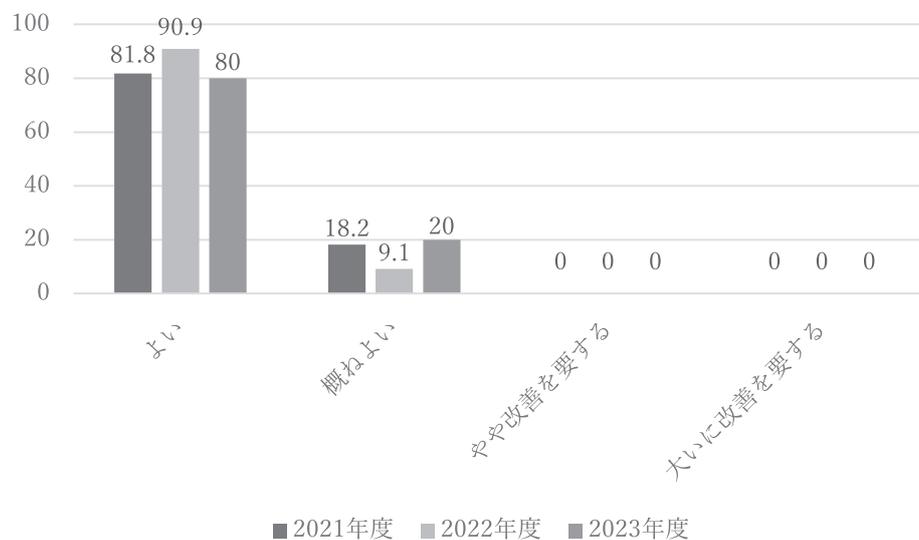


図2. ②教育実習の事前打ち合わせの手順等について

## 2. 実習生を対象にした事後アンケート調査の結果

### 1)対象者

・2023年度特支教育実習の実習生(4年生)25名

### 2)時期

・2023年12月

### 3)方法

アンケート作成・集計ソフト Microsoft Formsにより質問を示し、回答を求めた。

調査では実習生の配置の仕組みや、今回重点的に指導を行った模擬授業に関する事前指導、また、実

習校での学習指導案の添削に関する評価を求めた。また、教育実習の実情を知るために、前年度と同様に実習中の出勤時間や退勤時間、授業実習等の回数について回答を求め、過去2回分の結果と合わせて示した。

### 4)結果

回答数は24、回収率は96.0%であった。内訳は過去2回分の結果と合わせて図5～15に示す。

①学生の希望をもとに大学が実習校を指定する仕組みについて

学生の希望をもとにセンターが窓口になって実習校に受入れの依頼をしたり、実習校からの要望に対

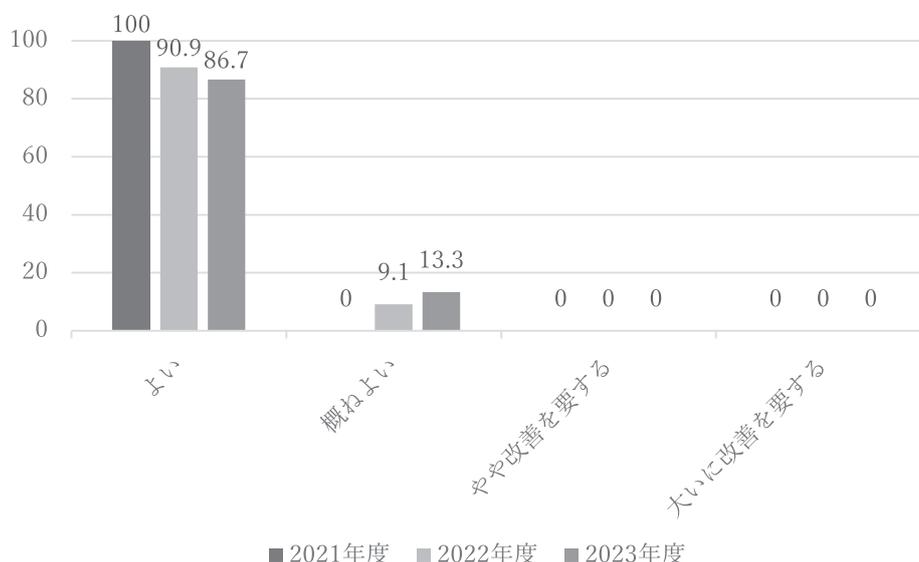


図3. ③教育実習期間中の大学の対応について

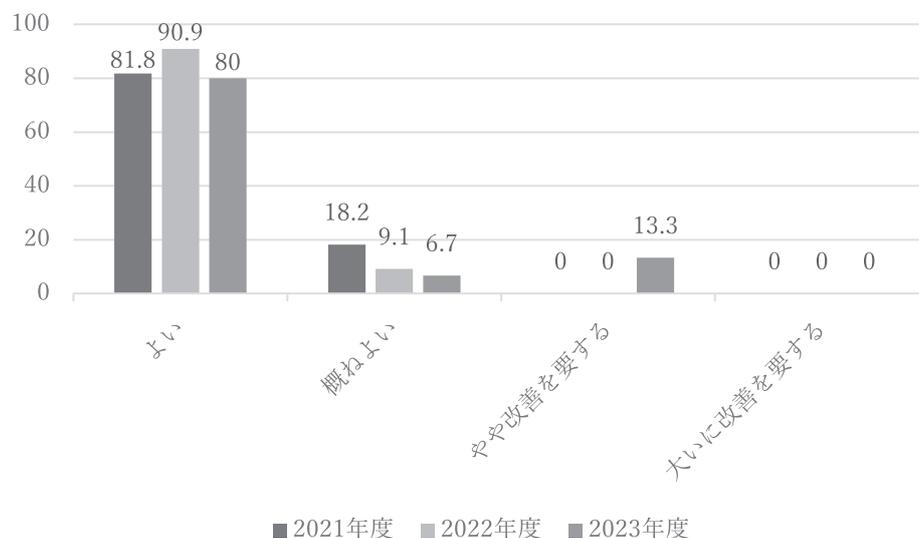


図4. ④大学の教育実習に向けての事前指導について

応したりする仕組みについての評価は、「よい」が10割であった。(図5)

その理由の多くは「希望通り通いやすい学校に配置されたから」であり、「これまで縁がない学校に実習をお願いする心理的負担が小さかったから」、「学校間の人数調整を大学がやってくれたから」はわずかであった。

②模擬授業を中心とした事前指導について

児童生徒の実態に合わせた教材の用意やTTによる授業の進め方、授業記録の取り方と活用の仕方など、模擬授業を中心とした事前指導についての評価は、「とても役立った」が6割近くにのぼり、過去3回の中で最高だった。(図6)

③実習校での学習指導案の添削について

実習校の負担軽減のために、学習指導案に関する指導は研究授業に関するものを除き原則口頭で行うようにいただいたことについての評価は、「よい」が6割弱(58.4%)、「物足りなかった」が2割(20.8%)、「その他」も2割(20.8%)と、3つに分かれた。(図7)

「よい」理由としては、「研究授業の指導案への指導の中で多くのことが学べたから」、「口頭で丁寧に指導いただけたから」があり、「物足りなかった」理由は、「準備不足な点を添削によって指摘してもらいたかったから」、「研究授業につながる日々の授業についての指導もいただきたかったから」等であった。「その他」の理由は、「指導いただく先生から指導案の添削をしていただいたから」、「研究授業の指導案に集中できたから」、「先生方もお忙しい中であ

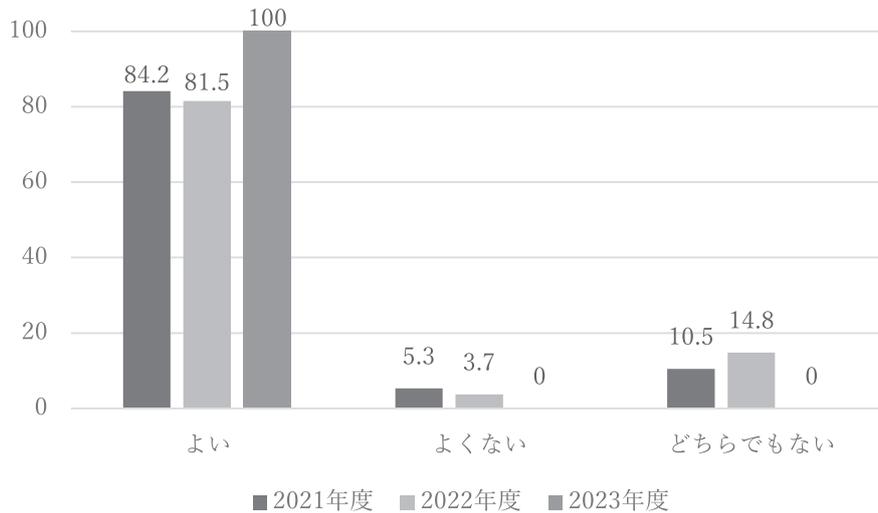


図5. 実習生の配置の仕組みについて

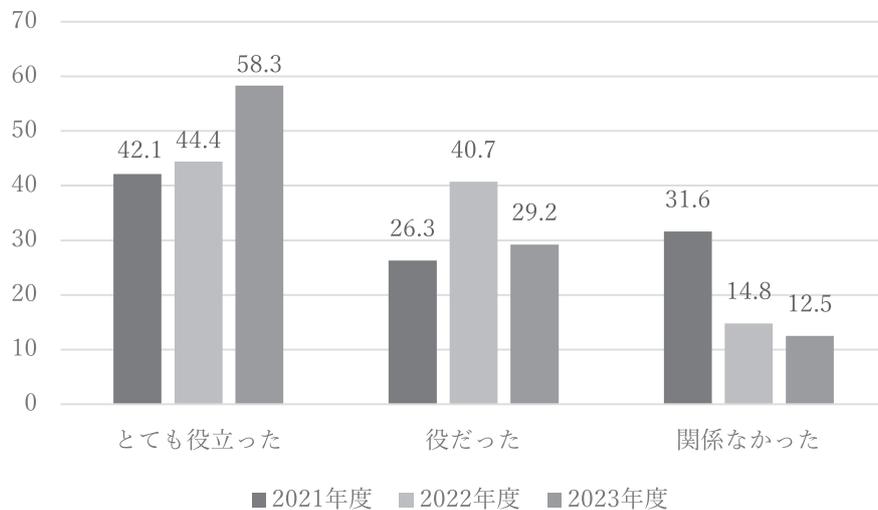


図6. 模擬授業を中心とした事前指導について

るが、可能なら少しでも添削していただきたかったから]であった。

④実習中の出勤時間について

実習中の出勤時間については、7時30分～8時が最も多く、過去2回と比べても大きな変化はなかった。(図8)

⑤実習期間中の退勤時間

実習中の退勤時間は、18時30分までが8割を占め、過去2回と比べて大きな変化はなかった。(図9)

⑥実習中の「参観」、「STとしての授業実習」、「CTとしての授業実習」の回数

実習中の「参観回数」(図10)は、2021年度には10回以下が多く、2022年度には逆に11回以上が多かったのに対し、2023年度は6～10回と21～25回の2つ山

があった。「STとしての授業実習回数」(図11)は、少ない回数から多い回数まで、どの回数も2割以下で大きな差はなかった。「CTとしての授業実習回数」(図12)は、回数の少ない方に山があるのは過去2回と同様だが、2023年度は「0～5回」が最も多くなっている。

⑦教育実習で自分が成長したと思う点

実習生が教育実習の成果と課題について自己評価したものを、過去2回分と合わせて記す。

自身の成長を感じた点としては、「障害の理解」を挙げる割合が高いのは過去2回と同じである。また、「子供とのコミュニケーション」、「待つこと」に成長を感じる実習生の割合は今回が最も高くなっている。「TTの実際」については5割近く、「特校の先生

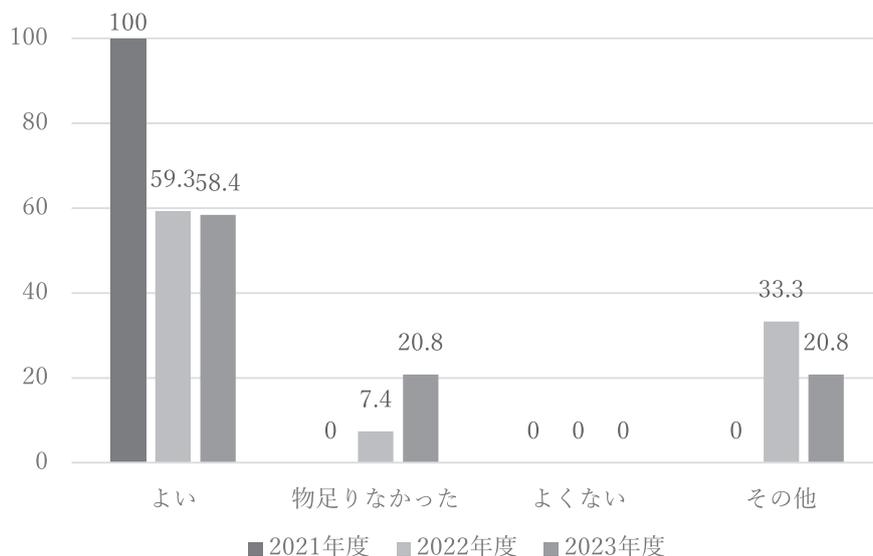


図7. 実習校での学習指導案の添削について

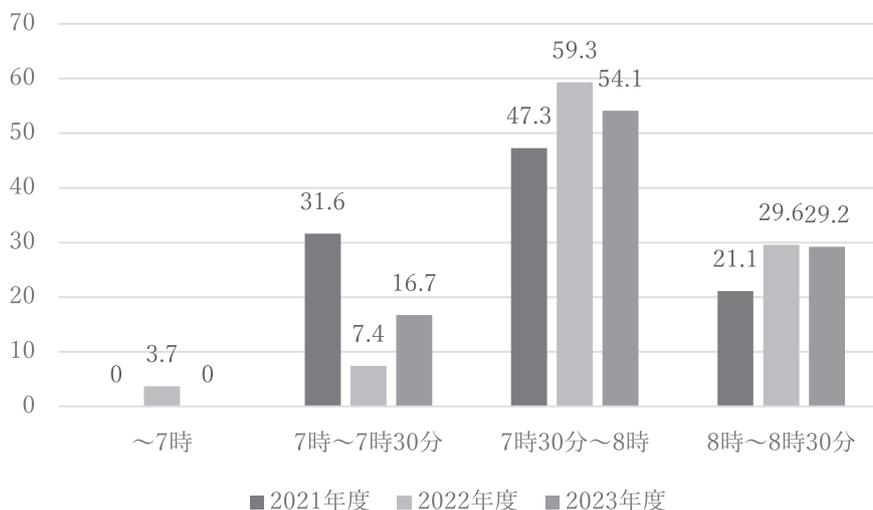


図8. 実習期間中の出勤時間

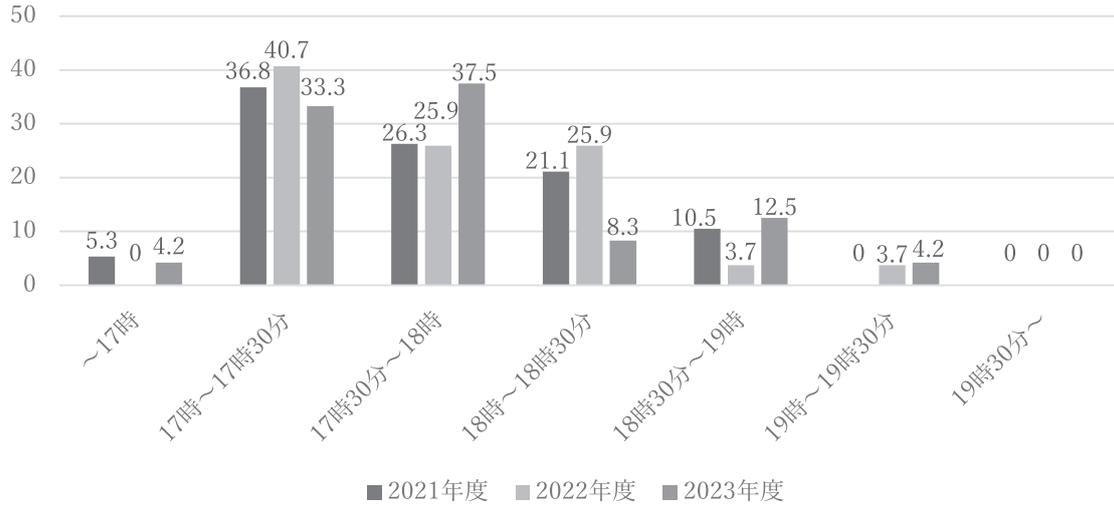


図9. 実習中の退勤時間

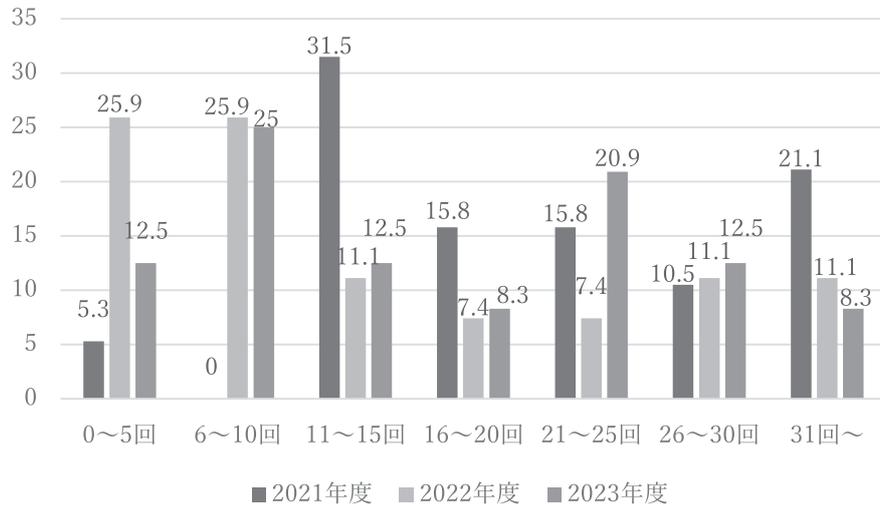


図10. 実習中の「参観回数」

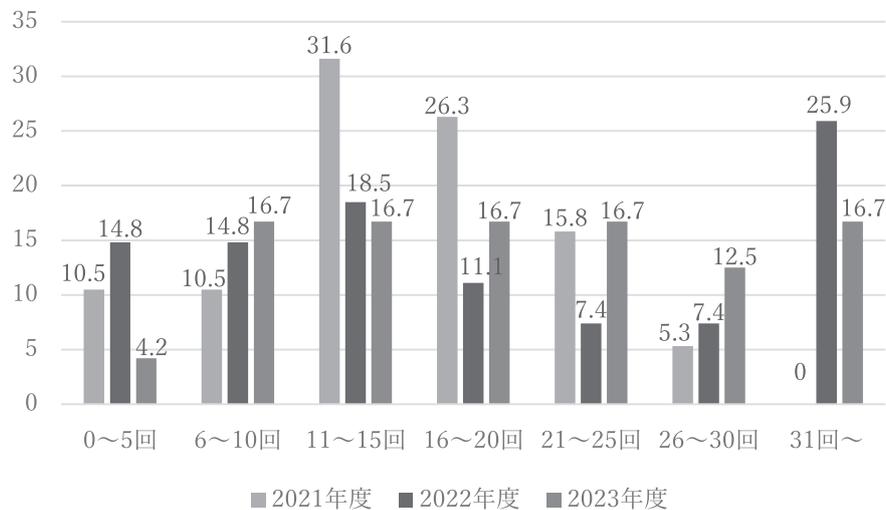


図11. 実習中の「STとしての授業実習回数」

の仕事の理解」についても4割を超える実習生が自身の成長を感じている。(図13)

⑧教育実習の前に勉強しておいてよかったと感じたこと

教育実習の前に勉強しておいてよかったと感じたこととして「障害の理解」を挙げる実習生の割合が高いのは過去2回と共通するが、今回はその割合が87.5%と極めて高かった。また、「特別支援学校の特徴」や「特別支援学校の教育課程」など、多くの項目について事前の学修内容を評価している。その一方、「学習指導案の書き方」と「他の人の実習報告」について

は、前回は下回った。(図14)

⑨教育実習の前に勉強しておけばよかったと感じたこと

教育実習の前に勉強しておけばよかったと感じたこととしては、「教材・教具に関する知識」、「日常生活の介助法」、「障害の理解」をはじめとして多くの項目で今回が最高になっている。その中で「TTの実際」と「特校の授業の進め方」の2つについては前回は下回った。(図15)

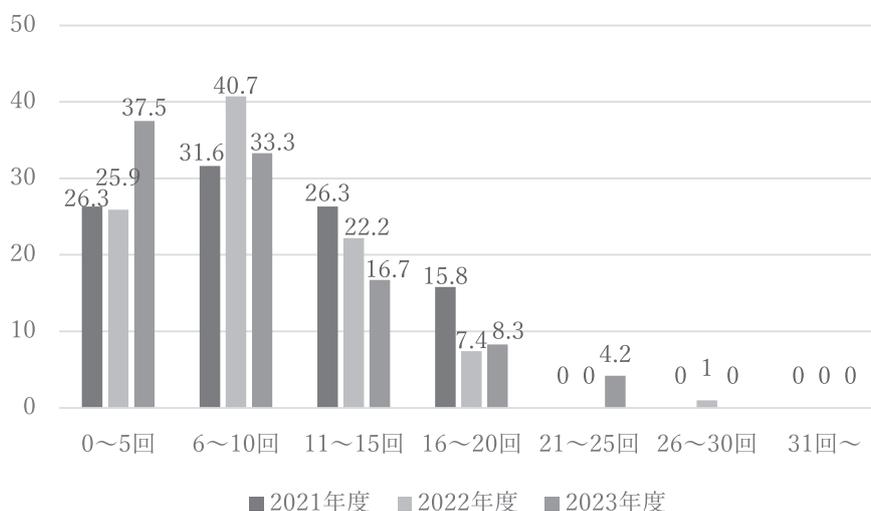


図12. 実習中の「CTとしての授業実習回数」

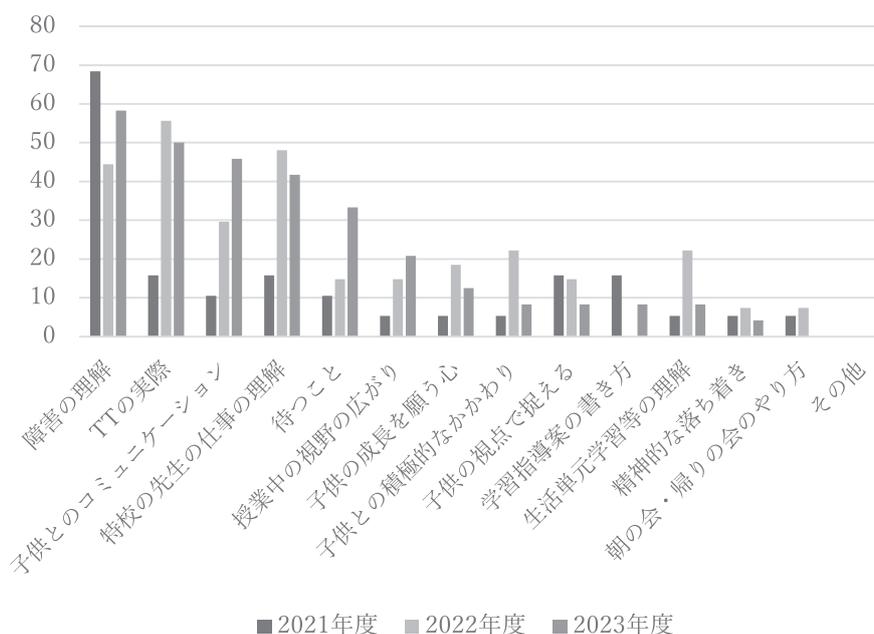


図13. 教育実習で自分が成長したと思う点

## IV. 考察

### 1. 実習開始までの手順並びに学部の事前指導について

2023年度特支教育実習に向けた事務手続きに関して、前年度の事後調査の結果を受けて対応した2点(実習受入れ依頼の時期、学生による実習受入れ依頼のための学校訪問)については、実習校から概ね評価

を得られたといえる。しかし、実習受入れ依頼の時期について検討を願う意見があったことは、実習校によって置かれた状況が様々であることが示唆された。今後は実習校の意向を個別に聞き取り、大学間の連携も図りつつ、実習校にとって適切な時期に依頼、訪問をしていくことが望まれる。

実習の事前打ち合わせの進め方についても概ね評価を得られたが、実習校毎に進め方が異なることが分かったため、日時の相談や関係書類の送達等につ

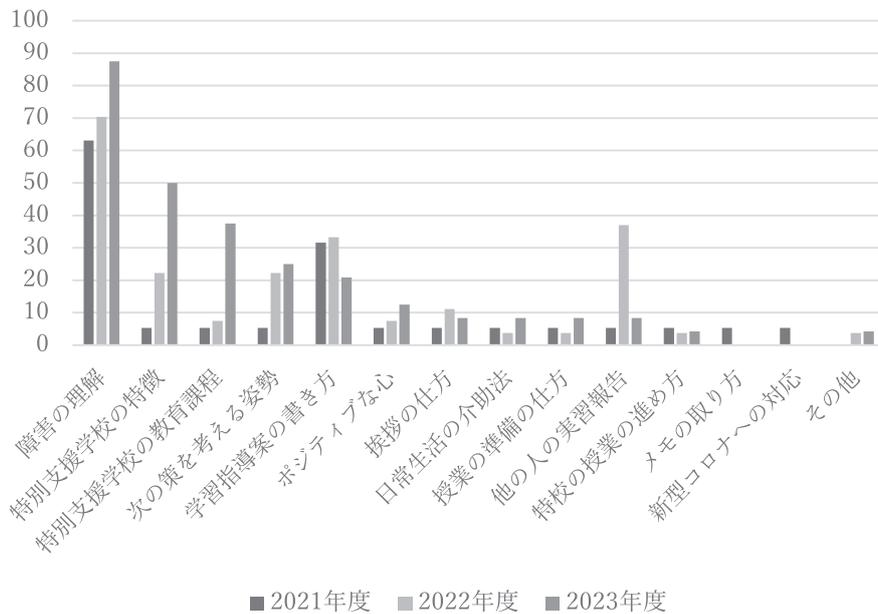


図14. 教育実習の前に勉強しておいてよかったと感じたこと

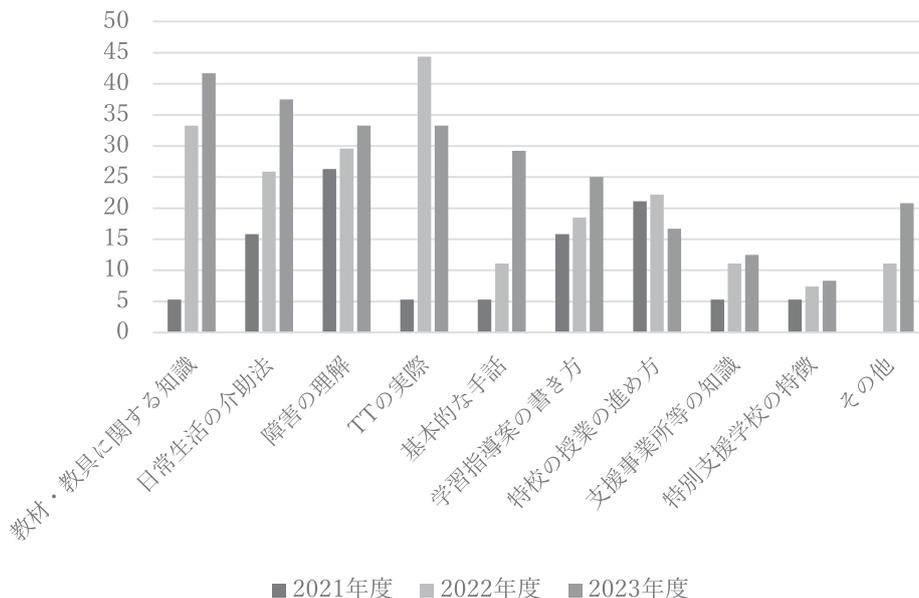


図15. 教育実習前に勉強しておけばよかったと感じたこと

いても実習校の意向に沿って個別に対応する必要があることが示唆された。また、事前打ち合わせに向かう実習生に対してセンターが行う個別指導についても、実習生の実態に応じて入念に行う必要があることが分かった。

実習に向けて大学が行う事前指導に関して、「よい」、「概ねよい」が9割を割り、「やや改善を要する」が2校(13.3%)からあったことは過去に例がないことであった。具体的な内容は、「不明な点は自ら質問する気持ち」、「実習日誌の書き方」、「学習指導案の書き方」から「提出物の期限を守る」、「社会人としての資質の育成」まで、教育実習に臨む際に根本的な部分の指導が必要であることを指摘するものであった。学部が実習校に指導を依頼する前提として、教育実習が滞りなく行われるよう、実習生の実態に応じた事前の入念な個別指導が必要であることを示唆された。

## 2. 模擬授業を中心とした事前指導について

実習生の配置をセンターが学生の希望を聞きながら行う仕組みについて、実習生の評価が初めて10割になった。これは毎回の事後評価に対応を重ねてきた成果と考えられ、学生が教育実習に専念できる環境を整えるものとして今後も継続していく意義がある。

今回力点を置いた「模擬授業を中心に据えた事前指導」については、実習生の9割近くが「とても役に立った」、「役に立った」の評価をした。特にTTの在り方については、実習生が「教育実習で自分が成長できたと思う点」の中で5割近くの者が「TTの実際」を挙げていることからその成果が指摘することができる。逆に教材・教具の扱いについては、「事前に勉強しておけばよかったと思う点」の中で4割を超える者が「教材・教具に関する知識」を挙げているため、残された課題となった。

指導教員による学習指導案の添削を口頭で行ってもらうことについては、「よい」の評価が6割弱で前年とほぼ同じであるのに対し、「物足りなかった」の評価が2割に達し、前年の3倍近くになった。学習指導案への指導を通じて授業について多くのことを学びたい実習生の気持ちも大事にしたいところであ

るが、指導教員に過度の負担をかけないためにも、口頭での指導内容を実習生が記録するのが適切と考える。

実習生が自身の教育実習での成長をどのように評価しているかについては、「障害の理解」、「TTの実際」、「子供とのコミュニケーション」、「特校の先生の仕事の理解」が4割を超え、障害の理解や子供との関係作り、特別支援学校の先生の仕事の理解等、教職の基本的な部分で成長を感じていたことが分かった。

逆に事前の勉強不足を感じたことについては、「教材・教具に関する知識」、「日常生活の介助法」、「障害の理解」、「TTの実際」がともに3割を超え、授業の準備や日常生活の指導等の具体的な内容を学んでおく必要を感じている。これらは次回の教育実習への課題となる。

教育実習の実態については、出勤時間、退勤時間、参観回数、STとしての授業実習回数、CTとしての授業実習回数を3回分比較したが、大きな変化はみられなかった。

## V. まとめ

特別支援教育を担う教師の専門性向上は国を挙げた課題であり、その中で教員養成を担う大学での教育には大きな期待が寄せられている。その中でも大きな役割を占める特支教育実習について、附属学校園を持たない多くの私立系の大学ではその指導を公立の特別支援学校に依頼せざるを得ない。その依頼にあたっては、大学も実習校が置かれた状況を理解し、実習校の意向を丁寧に受け止めて対応しながら、大学と実習校の双方で成果を実感できる教育実習を目指す必要がある。

本学部も複数年にわたって特支教育実習を準備する仕組みや事前指導の内容に改善を加えてきたが、未だその余地が多いことが今回の調査で明らかになった。今後も実習校・実習生の評価に真摯に耳を傾け、特支教育実習の改善に努めていきたい。

## 謝辞

本研究にあたっては、多くの実習生を受入れて熱心にご指導いただいた上、事後アンケート調査にも丁寧に回答いただいた長野県内外の特別支援学校の

先生方に感謝申し上げたい。実習中並びに事後アンケート調査で厳しいご意見をいただくことがあっても、それは特支教育実習をより良いものにしていくための激励の言葉と受け止めている。

長野県教育委員会特別支援教育課並びに長野県特別支援学校校長会のご協力にも感謝申し上げたい。両組織の協力なしにはそもそも本学部の特支教育実習とそれに関わる研究は開始できなかった。

教職センターの事務職員の皆様には特支教育実習の準備からまとめに至るまで、事後調査の準備・集計を含め多くのお力添えをいただいた。この場をお借りして感謝申し上げる。

## 文献

- 1) 矢野口仁・小島哲也・小林敏枝・内藤千尋, 「教育学部教職支援センターにおける特別支援学校教育実習の取り組み—実習受入校へのアンケート調査による評価と対応—」『松本大学研究紀要』19, pp.73-82(2021).
- 2) 矢野口仁・小林敏枝・樋口一宗・石黒栄亀, 「教育学部教職支援センターにおける特別支援学校教育実習の取り組み(2)—実習校からの要望への対応と実習校・実習生へのアンケート調査による事後評価—」『松本大学研究紀要』20, pp.151-163(2022).
- 3) 矢野口仁・樋口一宗・石黒栄亀・山本ゆう, 「教育学部教職センターにおける特別支援学校教育実習の取り組み(3)—実習校の教育課程に対応した事前指導に関する実習校・実習生による事後評価—」『松本大学研究紀要』21, pp.115-125(2023).
- 4) 今野邦彦・池田浩明・小川透, 「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(4)—文章記述からみた課題の分析—」『藤女子大学人間生活学部紀要』55, pp.95-100(2018).
- 5) 中村明美・高井弘弥・橋詰和也・宇野里砂, 「特別支援学校教育実習指導の提言と展望」『武庫川女子大学 学校教育センター年報』3, pp.23-32(2018).
- 6) 鎌田義彦・石黒栄亀・堀江幸治・高良秀昭, 「4年次特別支援学校教育実習への対応と課題～教員の資質能力の視点から～」『九州女子大学紀要』56-2, pp.153-165(2020).
- 7) 上越教育大学教育実習委員会, 『[改訂版]教育実習ハンドブック』上越教育大学出版会(2020).
- 8) 文部科学省, 「特別支援教育を担う教師の養成の在り方に関する検討会議報告」(2022). ([https://www.mext.go.jp/content/20220331-mxt\\_tokubetu01-000021707\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220331-mxt_tokubetu01-000021707_1.pdf) 閲覧日2023.1.14)